生の力を別の仕方で思考すること――ジャック・デリダにおける生死の問題――

吉松　覚

要約

序論ではデリダにおける生死という論点を検討するにあたり、いかなる問題系が構成されるかを規定した。すなわちデリダはフッサールを読解した『声と現象』で、経験的な生と、アプリオリな超越論的な生がフッサールにおいて対置されていることを指摘し、両者の生に先立つ超–超越論的な生としての生きることを提示したが、それは単に生物学的な意味での生ではないという点に注目する。このことからデリダにおける生の問題、ないしは生死の問題は、単に生物学的な次元にとどまるものではないとして、われわれの読解の対象が 1960-1980 年代の精神分析論および生物学受容と、1980 年代以降のテクストでの生の問題の展開の両方に及ぶことになることを示す。

第一部では、「生死」概念の内実を明らかにした。まず第一章では、フロイトが『科学的心理学草案』から『快原理の彼岸』を経て「マジックメモについての覚書」にいたるまで断続的に、かつ断片的に提示した周期性やリズムというモチーフ、そして『快原理の彼岸』で通りすがりになされたカントの超越論的感性論への批判を、デリダがいかに受け継いでいたかを検討した。それによって、デリダにおいて神経刺激の周期性が心的生を可能にし、かつ欲動のリズム、ないしは組織化を志向する生の欲動と、無機的な状態への解体を志向する死の欲動との拮抗こそが、生き続けるということを可能にするということを明らかにする。

第二章では、デリダのフランソワ・ジャコブ『生命の論理』読解から、開放系としての生命というモチーフを取り出す。ジャコブは、死によって補償されることのない生、すなわち分裂による単性生殖を繰り返し、寿命をもたない生物を生命の範例としようとしていたとデリダは解釈している。これに対し、第一章で提示した見地から、なぜデリダはジャコブのテクストをこのように批判的に読解したのかを検討する。第一に、ジャコブがあたかも本来の死や本来の有性性を想定しているかのような記述をしていることに注目し、そこから生命を純化しようとするジャコブの行論のなかに、死や性が代補として働いているのではないかということをデリダは示唆する。この仮説を裏づけるためにデリダが展開するのが、ジャコブ自身が主張していたテクストとしての生命というモチーフを換骨奪胎することである。そのさいデリダが参照するのは、フランシス・ポンジュの「寓話」という詩であり、われわれはこの詩に対するデリダの解釈を、「プシュケー」で展開されたこの詩の読解を補助線にして検討する。そしてこの詩が持つ自己言及的な構造と無限に増殖する可能性とをもって、デリダがテクストとしての生命というモチーフについての自ら思考を提示したことをわれわれは検討する。そして、「寓話」によって表象されるような開かれた構造は、純然たる生命、死によって脅かされることのない生命を範例としようとしたジャコブのなかに

も見出される。それが、ジャコブが熱力学やシュレシンガーの理論を参照することで述べていた負のエントロピーである。以上のように、デリダは自らの生死についての仮説を、生物学読解においても提示したことを明らかにする。

第三章では、デリダの精神分析受容に戻り、デリダの『快原理の彼岸』読解をジャン・ラプランシュのそれと比較する。フロイトは熱力学における「自由エネルギー」と「拘束されたエネルギー」という対を、自らがこの問題に関して依拠した僚友のブロイアーの意図とは逆の意味で自らの用語系に採用してしまっている。ラプランシュはフロイト自身を精神分析することで、これがブロイアーの穏当な仮説に不満を抱いていた結果として、フロイトのブロイアーへの「甚だしい無礼さ」を見出す。これに対してデリダはこの議論の錯綜にこそ可能性を見出す。つまり、当初はエネルギーの放散を留めておく機能として、すなわち一時的に不快を受け入れるための機制として考えられていた「拘束」が、『快原理の彼岸』においては外的な衝撃を仮に抑えておくための機序という役割を与えられることになる。デリダの「思弁する」の読解を進めていくことで、この「拘束」概念と、エネルギーを解放する「脱拘束」概念こそが、有機体のエネルギーの締め付けのバランスを構成するものであり、かつ『快原理の彼岸』の錯綜した議論がまさに生死を入れ子状に、行為遂行的に表しているとデリダが読解したことを明らかにする。

以上第一部では、死の欲動と生の欲動、エントロピーと負のエントロピー、脱拘束と拘束などのような力の拮抗こそが、生き続けることを可能にするという思考が 1960-1980 年代のデリダに見られることがわかり、それが「生死」概念であると考える。

第二部では、この生死の問題を通じて提示された思考が 1980 年以降展開していくさまを検討する。第四章では、翻訳論を扱う。ベンヤミンは「翻訳者の使命」において、翻訳はただ単に原作を原語で理解できない者のためのものではなく、翻訳に固有の意義を見出していた。それが、翻訳において言語同士の差異が明るみに出ることで生まれる、純粋言語を取り戻さんとする運動であった。そしてそれが翻訳というテクストの生き延びないしは死後の生命であるとされた。デリダの盟友ポール・ド・マンは『理論への抵抗』の最終章でこのテクストを取り上げ、自然過程がつねに目標から逸れつづけることをもって、翻訳という死後の生命を論じている。これに対してデリダは、「翻訳者の使命」を扱うさいに、バベルの塔の神話を持ち出す。すなわち、バベルという語が固有名であるのか、それとも普通名詞であるのかという問題の、翻訳についての思考における重要性を掲げる。そして「翻訳者の使命」の読解を開始するデリダは、翻訳という生き延びあるいは死後の生命という隠喩は一見して与える印象とは異なり、翻訳という現象において見られる作用を理解することでこそ、声明を理解できると述べる。そしてデリダにおける生き延びは単に残存しつづけるというだけのことではなく、よりよく生きると主張する。これは純粋言語へと向かう運動のことであり、表現や音の響きといった言語の物質的側面と意味の両方を完璧な形で伝える翻訳が存在しないことこそが、翻訳を要請するというデリダは述べる。そこから、この完全な翻訳の不可能性と、意味伝達の可能性のバランスこそが、テクストを生かしめるものであるとい

うデリダの主張を引き出すことを試みる。

第五章では、デリダにおける法的決定の問題と約束という問題を検討する。まずデリダが1990 年代に展開した決断論において、理念としての正義に向かいつづけるために既存の法体系を脱構築することこそが正義であるというデリダの思考を確認する。しかし、法的な決定が善に転じるか悪に転じるかが予見しえないという決定不可能性こそが重要であることをデリダが主張していること、それゆえにデリダの思考は目的論に抵抗するものであることもわれわれは同時に見出す。それゆえこの理念としての正義は決して現前することがなく、絶えず逸れつづけていく。加えて『法の力』第二部での、ベンヤミンの「暴力批判論」のデリダの解釈も検討する。法による国家の暴力を廃絶しようとするベンヤミンに対して、デリダは法と暴力の癒着を認めつつも、法を通じてしか正義は現れる可能性を持たない。それゆえに、法を無限に変革していくことこそが正義であるというデリダの思考を示す。そして無限の法変革による社会的な生の変容だけでなく、『有限責任会社』跋文において、決定不可能性を欠いた自己の完全な現前こそが死であるというデリダの発言を受けて決定不可能な状態が残ることこそが生であるとして、デリダの法論において生の問題が見出せることを示す。

第六章では、デリダの『信と知』、そして最晩年の『ならず者たち』における自己免疫性の問題から、『ならず者たち』における「生の力を別の仕方で思考すること」というパッセージを解釈する。自己免疫性とは、自らを外的から守る免疫系が不調をきたして、自らをも攻撃してしまう症状であり、デリダは民主主義を守るという名目で民主主義を却って棄損する出来事を分析するさいにこの隠喩を用いている。そしてその用語法に対する、死の欲動や一次サディズム、一次マゾヒズムなどの精神分析的な概念のつながりを検討し、そこに自己性の破壊というテーマがあることを確認する。つまり、民主主義のこのような自己免疫的な構造とは、民主主義がその原理に従う結果、民主主義という政体をとるという自己性すらも破壊する危険性があるということを意味していた。しかし、この危険性とは裏腹に、政治を変革することの可能性も示されており、デリダはそこに肯定的な可能性を見出していた。この終わりなき政治批判というモチーフから、デリダと一見して理論的に近いシャンタル・ムフの民主主義論との比較を行う。ともにリベラル民主主義に抗する思想家であり、政治批判こそが政治の改善であるという点では一致するが、政治批判の議論においてはリベラル民主主義的な合意を必要とするムフに対し、そのような制限が「民主主義について民主的に語ること」の制限となるとデリダは指摘する。すなわち、民主制をとるという決定を民主的に決定することなく、法を用いて半ば暴力的に定めるしか、民主主義を維持しえないのである。しかし、この現在可能な民主制が十全に民主主義的でないからこそ、絶えざる改善可能性が残りつづけ、無限に変革していくという運動性が可能になる。そしてこのような民主主義の運動において重要であり、かつ生物学的隠喩や精神分析の概念を用いて見出されたテーマ自己性を破壊することの可能性をもった生こそが、別様に思考された生であることを示す。ここに、第一部の三つの章での中心的なテーマであった諸力の拮抗としての生死とい

うモチーフと、第二部のこれまでの章で検討してきた非目的論的で終わりなき運動性とが、『ならず者たち』で収斂していくと考える。

このように第二部では、絶えず目的論的な最終目標から逸れつづけるデリダの思考を見出す。目的論的なテロスとは何も変化を必要としない「理想」の状態ではあるが、第一部の議論からの延長で考えるなら、死の欲動が目指す先の死のように、凪のような状態であるとも考えられる。デリダはこの凪を志向することなく、むしろその途上でこそ生じる力の拮抗や逸脱にこそ可能性を見出す。この生と死の二項対立を解決させないことこそが、デリダが一貫して思考していたことであり、本研究全体と第六章の題にもなった「生の力を別の仕方で思考する」という、『ならず者たち』における表現でデリダが言わんとしていたことであろうと考える。

結論部では、デリダの死の直前に行われたインタビュー『生きることを学ぶ、終に』を検討し、そこでデリダは自らの思想を生の肯定であると確言していることを踏まえて、これまでで示された生あるいは生死という問題がデリダの最初期から最晩年までを貫くことを示す。